

日蓮大聖人御書全集

うえのどのごへんじ

上野殿御返事

さんさい こと

（三災の事）

新版
1882
〜
1883

うえのどのごへんじ さんさい こと

上野殿御返事（三災の事）

こうあんがんねん

うるう

がつ

にち

さい

なんじようときみつ

弘安元年（78）

閏10月12日

57歳

南条時光

家

芋 いちだ

柑 子 ひと籠

銭 ろつぴやく

代

ご座

いえのいも一駄・こうじ一こ・ぜに六百のかわり御ざの

筵

じゆうまい

た お

むしろ十枚、給び了わんぬ。

こぞ

ことし

だい 疫

くに

起

ひと

し

おおかせ

去・今年は大えきこの国におこりて、人の死ぬこと、大風

き

倒

おおゆき

くさ

折

いちにん

残

に木のたおれ、大雪に草のおるるがごとし。一人ものこる

見

そうら

ことし

かんおん

とき

べしともみえず候いき。しかれども、また今年の寒温、時

従

ごこく

でんぱた

満

そうもく

野

山

生

塞

にしたがいて、五穀は田畠にみち、草木はやさんにおいふさ

ぎよう

しゆん

よ

じようこう

初

見

がりて、堯・舜の代のごとく、成劫のはじめかとみえて

そうら　　はちがつくがつ　　おおあめ　　おおかげ　　にほんいちどう　　ふじゆく

候いしほどに、八月九月の大雨・大風に、日本一同に不熟、

生　　残　　ばんみんふゆ　　過　　い　　かんぎ　　しょうか

ゆきてのこれる万民冬をすごしがたし。去ぬる寛喜・正嘉に

超　　きた　　さんさい　　劣

もこえ、来らん三災にもおとらざるか。

じかいほんぎやく　　とうぞくこく　　じゅうまん　　たかい　　競　　かつせん　　こころ

自界叛逆して盗賊国に充満し、他界きよいて合戦に心

費　　たみ　　こころ　　ふこう　　ふ　　み　　たにん

をついやす。民の心、不孝にして、父母を見ること他人の

そうに　　じゃけん　　くけん　　えんこう　　合

ごとし。僧尼は邪見にして、狗犬と猿猴とのあえるがごと

じひ　　てん　　くに　　守　　じゃけん　　さんぼう

し。慈悲なければ天もこの国をまぼらず、邪見なれば三宝に

捨　　えきびよう　　止　　見

もすてられたり。また疫病も、しばらくはやみてみえしか

きじん　　帰　　い　　ほつこく　　とうごく　　さいごく　　なんごく

ども、鬼神かえり入るかのゆえに、北国も東国も西国も南国

いちどう 病 歎 由 聞 そうろう
も一同にやみなげくよし、きこえ候。

世 しゆくぜん ほけきよう ぎようじや 養
かかるよに、いかなる宿善にか、法華經の行者をやしな

たも そうろう
わせ給うこと、ありがたく候、ありがたく候。事々見参

ときもう きようきようきんげん
の時申すべし。恐々謹言。

こうあんがんねんのちのじゅうがつじゅうににち
弘安元年後十月十二日

にちれん かおう
日蓮 花押

うえのどのごへんじ
上野殿御返事